

せ た か む い

発行 古平町史編纂室
文化会館 842-2590
第193号 平成17・10・1

年表で読む

古平の歴史

《99》

果樹園芸

リンゴ①

■リンゴ栽培の始まり

明治二年、本州と疎外されていた当時の蝦夷地の豊かな将来性に目が向けられ、開拓使が置かれると地名も北海道と改められた。

本州とは違う気候風土から、開拓にはアメリカからの知識や技術を取り入れ、農業の振興を図ることに努めた。その結果、寒冷地である北海道の農業も次第に改善され、本州とは違った形での経営が行なわれ大いに発展を遂げた。

明治五年、開拓使は冷涼地に適したリンゴの苗木をアメリカから



輸入し、道内の主な地域に無償配付した。その数はリンゴ五九五本、その他の果樹七二八本とある。古平郡内に何本のリンゴ苗木が配付されたかは不明だが、明治九年以前に植え付けられた樹は一本という記録がある。最初の年はチヨペタン沢の石井常

←古平で第一号のリンゴの樹

助に配付し、各農家にも何本か配付したが、初めてのことであり、管理の方法もわからなかったのかほとんどは植え付けられたままの状態であった。しかし、苗木の生長が良かったことから、リンゴが古平の土地に適しているのではないかと、浜町の関口利勝、中山泰岳、高野常吉、沖村の田畑、勘四郎らが率先して栽培を始めた。

そして、明治三年にはその本数は一、五七九本に増加した。同年、余市郡では三、八八六本に達していた。この頃にはすでに道内でも栽培するところが増え、

リンゴは北海道の特産物として、明治三〇年の北海道用・尋常小学校読本巻三に「林檎」

リンゴが載っている。古平に植えられたリンゴの第一号といわれる樹は、その後、年と共に樹幹も腐食して空洞となっていたが、樹の

←小学校読本にも載った「リンゴ」

第十八課 林檎

あの林檎畑を、

見まはり居るは、此

家のあるトにて、

はや、かみも白く、

こゝも かみたり、

あの 林檎畑は、

今より十七八年前に、



傍にはその由来を記す標示板もあったが、昭和 年、清岡団地の造成にともなつて公園が新設され、その際に百年も経て老齢化していることから、移植も困難とみて伐採されてしまい、惜しいことに現在はその痕跡も全く無くなつてしまつた。

■「リンキ」という呼び名

古平では以前、リンゴのことを「リンキ」という人がいた。これは東北あたりの方言かと思つていたら、実は古い呼び名なのである。日本に昔からあるリンゴの仲間であるワリンゴのことで、漢字で「林檎」と書く。読み方としてリンキン・リンキ・リンゴウ・リュウゴウなどである。リンキは立派な呼び名である。

大正一三年 続

▼四月三〇日

朝のうちは快晴であつた。聞けば平野梅吉さん、風呂屋で入浴中に急に腦溢血で卒倒、そのまま亡くなられたとのこと、何と人間はものろいものだ。九時頃お悔やみに行く。昨日は平素の通り元気で働き、気持ちよく入浴に行つたという。帰途、久しぶりに農園を見廻る。約半年を雪に埋もれた草木も追々春風で芽を出しかけてきた。一〇余年前、父が支店から苗木をもらつて植えた杉一七、八本が、一丈以上にもなつた、リンゴもまだ寒いのか芽を出したばかりだ。一〇時半帰る。正午頃から小雨になる。困おつかさん、二ヶ月ぶりで札幌から帰られる。

▼五月一日

起床七時、練量はさらに無く一日増しにさびしくなつた。十日ほど前には猫の手も借りたいような有様だったが、今は一段落し、町を通る人も気軽そうだ。前浜の共同歩方ほか二、三カ統は、今日揚網し片付けにかかつている。刺網も網やモッコなどを洗つて片付けている。

今日は平野梅吉さんの葬式、熊さんが手伝いに行く。私も会葬に行く。店もカレ針、ハカリなどがポツポツ売れていく。東洋へ漁況通知状を出す。総選挙も来る十日だ。第二区檜山、後志管内は、丸山、北林、澤田等の競争だが、いまのところいたつて静かだ。挨拶状が来るくらいで一向に振るわぬ。小樽は山本、森の争いだ。

▼五月二日

高野名幸作さんの日記から

《104》

当時の世相を見る

天気快晴、今朝、練一、二杯とつたところがある。午後、四〇日ぶりで新地方面へ行く。缶でしばらく話す。今年は刺網はどこも悪かつたが沖村だけはどうかやら平年漁とのこと。幸治から手紙が来る。入

天気快晴、今朝、練一、二杯とつたところがある。午後、四〇日ぶりで新地方面へ行く。缶でしばらく話す。今年は刺網はどこも悪かつたが沖村だけはどうかやら平年漁とのこと。幸治から手紙が来る。入

学試験の成績を知らせてきた。

▼五月三日

起床七時、天気快晴。練製品の干し上がり申し分ない天気だ。信用組合へ融資を申し込み借り入れを

各派の競争も激しくなつてきた。中田派は本人と運動員が来て、向かいの電気会社を事務所に行っている。戸別訪問で盛んに歩いている。夜、新地古盛座で政見発表演説会があるとのことだ。

▼五月四日
快晴の天気が続く。一年中で一番よい気候ならん。練漁もいよいよ

▼五月五日
終漁となつた。

▼五月六日
今日はこの頃にならない寒さであつた。古平の選挙戦もだんだん緊張し、

▼五月七日
店は切り揚げ用の綿糸類がポツポツ売れる。建網は練漁が皆無で、ほとんどが揚網したようだ。岩井君から北村選挙事務所の立看板を依頼された。今日は大正八年の恐るべき浜町の大火記念日だ。恵比須神社で鎮火祭があり参詣する。佐渡行き、その他積取船が毎日のように入港し、荷積みをしている。

▼五月八日
海産物は日増しに暴落しているの

で、町中の人気も引き立たぬ。

▼五月九日
昨夜来の雨、今日も一日中降る。

▼五月一〇日
昨夜は大暴風で大時化だ。朝に

なつて雨も上がり晴れ天気になった。しかし海はまだ大時化が続いている。今日はいよいよ衆議院議員選挙当日だ。六時頃に丸山、澤田等の候補から電信が三通も来る。父は九時頃投票に行く。当地の大勢は澤田、丸山、中田、北村の順になるようだ。幸治から手紙が来る。遠足で水源地まで行ったとのこと。

▼五月一日

一昨日来の時化は近年稀なるものであったようだ。大時化は今日も続きまだ波がある。(カ)の浜へはナマコ、ワカメ、その他カンズなどが打ち寄せられていて、四、五〇人が集り賑やかだった。父や熊さんが行つてナマコを七モツコも拾つて来た。また、一間もあるサメが二匹も寄つていたとのこと。

▼五月二日

晴天だが風が強い、高太郎さんは今日小樽へ行かれた。熊さんと妻は畑へ時きつけに行く。そのほか枝切りしたものを束ねている。私は留守番だ。衆議院議員の当選者、札幌一柳(憲政会)二、一五七票、小樽 山本(同)一、八五二票、函館 佐々木 一、九〇〇票、旭川 坂東 八五九票

室蘭 栗林 五八七票

▼五月一日

天気は良いが風が冷たい。熊さんと妻は農園へ枝を束ねに行く。その後、リンゴに葉を散布することだ。店は二人ほど勘定に来る。四郎と悦三を連れて浜へ出て見る。身欠の積取り船が二隻入港している。五月勘定の目録作りをする。衆議院議員選挙の郡部の開票結果、

・六区(石狩管内)

岡田 一、〇八八票

・七区(空知管内)

神部 一、七八四票

・八区(留萌管内)

東 一、五九七票

・九区(宗谷管内)

浅川 一、九七二票

▼五月一日

今日は珍しく快晴、そして風も無く静かな天気だ。熊さんと妻の外、鎌田さんも農園へ行き、リンゴの葉かけをやっている。父も久し振りで出かけて行つた。店は建網の切り上げで綿糸の外、ハカリ、竹こうりなどが売れる。夕方浜へ出て見る。佐渡行きの汽船が(カ)前の浜に入つて、胴鯨などを積み込んでいる。鯨粕も干し上がり、納屋下しめす

んで後片付け中だ。

・一〇区(胆振・浦河)

手代木 一、一五四票

・一二区(渡島地区)

黒住 一、三二三票

・二二区(後志・檜山)

丸山 一、七六三票

澤田 一、四一七票

▼五月一日

起床七時、熊さんは昨日リンゴに葉をかけていて手を痛め、今日は休む。時々小雨が降るので、家で佐渡送りの小包をこしらえる。妻は二階の片付けなどをやっている。大阪の繁夫さん、東京のセツさんのところへ身欠などを送る。稲鯨忠兵衛へイワシ網を注文する。悦三を連れて浜へ出て見る。内地行きの汽船二隻が入港していて積み込み中、鯨製品はますます下落している。鯨粕二、五〇〇円、胴鯨二、〇〇〇円ぐらいの相場だ。

▼五月一日

朝から曇天、時々小雨が降る。父と熊さんはエビス倉で胴鯨を束ねている。私は午前中、倉の後片付けやガラス拭きなどをやる。午後、久し振りで新地方面、銀行へ行く。イワシ網や外の件で(三)に寄る。い

ろいろ話し午後五時頃帰る。曇天で寒い天気だ。湾内の内地行きの汽船二隻が、身欠や胴鯨など盛んに積み込み中。

▼五月一日

起床七時、朝から小雨が降り止まず寒風が吹き時化だ。五月決算の目録書きやら帳簿を調べる。入金もポツポツあり、今日は三軒で一〇〇円程入金する。昨年の今頃なら一、〇〇〇円以上は入金していたのだが、今年は鯨製品が下落のため、売れ行きの方も思わしくない。商人は金融逼迫のため手出ししかねるので、ますます安くなるばかりだ。新聞によれば一六日午前一時頃、青森県八戸町で火事があり、一、三〇〇戸余りが焼失、町内は九分どおり焼けてしまったとのこと。実に大惨事だ。

▼五月一日

起床七時、今日は日曜日、珍しい天気快晴、静かな空だ。子供等は日曜日なので山へ遊びに行くことにした。握り飯、アメ玉などを支度し、手かご、風呂敷などを持ち、文治、吉治、(四)常雄さんと四人で出かけた。暑からず寒からず、一年中で一番心地よいのどかな時季だ。(四)

の杉山(ハイカラ山)へ登ったが、道路わきでフキ、タケノコなどを取り、一時三角点のある頂上に着いた。四方の眺望が実に良い、沢江、浜中から新地、入船町方面の人家まで見え、青い海原も広がっている。店にばかり閉じこもっているの、こんなところに来ると気もののびのびする。見晴らしのよいところで握り飯を食べ、ポカポカする日光を浴びて草むらに寝ころび、一時に下山する。坂井さんに荷物を預けて、ススキナイへ山を見に行く。植林した落葉松がずいぶん生長した。フキを沢山背負って帰る。五時頃湯に入る。

▼五月一九日

昨日の山遊びで疲れて七時半に起床する。天気は快晴だ。鯨漁もたいい後始末が終わり、漁夫も少しはヒマになったようだ。畑方面から来て刺網をやっていた人達も、馬車に荷物を積んで戻る人も見え、三月、浜へ来るときは元気がよかつたのに、今年は帰る時はさびしうだ。熊さんと妻は農園へイモの蒔きつけに行く。小樽へ出ていた与太郎さんから、岡崎さん等と相談して小資本で有望な商売を見つけた

から、近々中に帰って話をする。連絡があつた。店は鯨製品の下落で売買がないためか入金も思わしくない。夜は十六夜の月がこうこうとして良い夜だ。明日は学校で遠足があるというので、支度の子供等は大騒ぎだ。

▼五月二〇日

起床七時、鯨製品下落で売買がなく市況も沈静。従つて入金も無い。天気は快晴で暖かく夏らしい気分になった。熊さんと妻は農園へイモ蒔きに行く。学校の遠足なので子供達は早くかに起きて支度に大さわぎだ。大阪のおじさんが富丸でお出でになる。浜まで出迎えに行く。本陣の浜では吉井さんが、本年からやるイワシ刺網の試験に出漁するための準備に一生懸命だ。何でも高島から経験のある人が来て出漁することだ。本業として好成绩を得させ今後の発展を祈る。もし今回相当の成績を挙げれば、今後出漁する船も出るかも知れない。

▼五月二二日

日増しに暖かく、新緑の季節となった。月末も近づいたので、美国方面へ景氣祝いかたがた、九時頃自

転車で出かけた。自転車は安藤に預けて歩く。群来村の坂の上からは海も山も見晴らしがよく、初夏のような景色で氣も晴れ晴れする。

⑤に寄り話し、のち⑥に寄る。笹山喜八とも話し、昼食を馳走にする。あちこち用達しをする。本年は美国は大大漁だったが、目下鯨製品の暴落に加え、買い人がないので景氣も引き立たぬとのこと。しかし、大大漁のため諸掛かりが意外と高く、製品の方が安く、結局、平年漁程度だったことだった。群来村方面を廻り五時帰る。聞けば中姉さん、今朝、急に心臓病で死亡の由、実に氣の毒なことだ。

▼五月二二日

今日も天気快晴、漁夫も浜中、沢江方面はたいい帰り浜はさびしくなった。幸治から手紙が来る。臨時試験中とのこと。英語は満点取ったという。中姉さん死亡でお悔やみに行く。

▼五月二三日

天気快晴、熊さんは農園行き。鯨製品は日増しに暴落、鯨粕二、五〇〇円、胴鯨一、七〇〇円、数の子一二、〇〇〇円、身欠九く一七、八円まで。町内の売買もなく

不人気だ。午後、自転車で銀行へ行き預金のうち入船町方面へ行きイワシ網の入荷を通知する。本年は古平で四隻程がイワシ網をやる。夜、中姉さんの通夜に行く。この夜、帝電(電気会社)で、①公園に夜桜見物のための電灯をつけるというので、大勢の見物人が行く。

▼五月二四日

今日も天気快晴、この頃は毎日の晴天続き、そして暖かい、よい気候だ。起床早々、自転車で畑の土岐に馬耕の依頼に行く。帰つて中葬式を送りに行く。不幸続きで氣の毒なことだ。正午帰る。午後二時頃、久し振りに農園へ行く。熊さんは出面二人と枝吊りやら肥料をやっている。今は梅とスモモの花盛りだ。サクランボは沢山蕾がついている。リンゴ50号はようやく蕾の先が赤くなつたばかり。ほかに中生晩生はまだ蕾も小さく固い。月末か六月上旬に花盛りか。今はどこも蒔きつけで忙しく畑に出ている。

▼五月二五日

今日は朝から雨降り、熊さんは五ピス倉の片付け、終わつて③の倉へ行き片付ける。一〇時頃電話があり、全へ松山丸が入港、佐渡からア

パ縄三六七個着いたとのこと、以外に早かった。すぐに全へ行き調べたら、赤泊からとエビス物産からで全部到着した。運賃は一個六〇銭、馬車で三、四台運搬したら雨になり止めた。夜、宮崎さんで通夜があり行く。

▼五月二十六日

今日は時々小雨が降る。㊦の倉へ一時預かったものもあるので、引き取りに行く。今日までに二五〇個程運搬した。

▼五月二十七日

一昨日来の雨も今日は晴れた。しかし道路はまだ悪い。松山丸積みのアバ縄、今日も馬車で運搬するので、熊さんと私と出面一人を頼んで港町へ行く。今日は汽船が三隻入港していて、鉢粕、身欠などを積込んでるので馬車屋もなかなか忙しいようだ。午後六時頃までに荷物を引き取り、これで安心した。六月六日に運動会があるというので、子供等は練習に熱心だ。

▼五月二十八日

曇天寒空だ。店は月末になったので、熊さんは早くから通帳や書き出しの配達をやる。例年なら今日あたりまでに二、三千円の入金があるのに、まだ七、八百円だ。三

一日までに五、〇〇〇円(三分の一)の入金があればよいが。六月中旬に五、〇〇〇円、その後の四、五

千円は明年まで延期するかも知れぬ。とにかく今年の掛け金回収はどこの店でも不結果とのこと。刺網は不漁、それに鉢製品は大暴落のため、近年稀なる不況だ。そして行商や保険会社員が沢山要り込み、宿屋は繁盛とのこと。午後から妻は竹の子とワラビ取りに行き、六時頃帰る。寒い寒い日だ。

▼五月二十九日

小雨が降り出し、そして寒い。冬のような。自転車に乗っても手が冷たい。月末なので熊さんは掛取りに出かける。合計で一、三〇〇円程の入金があった。夜、向かいの末政宅で、芸者の手踊りや剣舞などがあるというので、妻や子供達も見に行く。志次第といふことで、三〇銭祝儀を上げたとのことだ。

▼五月三十日

朝から小雨がシトシト降り続き、寒い日だ。月末なので、熊さんは朝早くから新地方面へ掛取りに出かけた。浜町も廻って一、二〇〇円

〇〇余円の入金があった。不況の割には上等の方だ。妻は小雨の中を出面二人と農園へ蒔きつけに行

▼五月三十一日

陰うつな天気も今朝はカラリと一天晴れて、気も晴れ晴れする。熊さんは集金、一年中で一番の集金日だ。店へも代わる代わる入金に来るので忙しい。妻は午後から子供等と竹の子、ワラビを取りに行き夕方帰ったが、沢山取ってきた。

この日、集金合計二、五〇〇円、今年としては上成績だ。貸し方合計一七、〇〇〇円、二八日まで一、〇〇〇円、二九日、一、六〇〇円、三一日、二、五〇〇円、合計六、五〇〇円余りが入金した。この分だと六月中に七、〇〇〇円は入金の可能性があり、明年まわしは三、五〇〇〜三、六〇〇円か、悪くても四、〇〇〇円ぐらいだろう。今年の漁からみてこれくらいいけば仕方がない。まずは大体予想した通りの状況だ。

▼六月一日

起床七時、天気快晴、暑からず寒からず一年中で一番気持ちが良い。熊さんと妻は農園へ蒔きつけに

行く。店は今日も六、七〇円入金しただけで、父は子供等が喜ぶといつて鯉のぼりを揚げる支度をして、大きいのを三尾揚げた。風に大きく揺れて威勢がいい。悦三や四郎は大喜びだ。幸治から札幌で、中等学校連合運動協議会があるので行くとの電話がある。この好天気、大勢して札幌行くのはどんなにか楽しく、喜んで行つたろう。

▼六月二日

起床六時半、天気快晴、農園も蒔きつけで忙しい。天気もよく暖かくなった。午前、本陣の浜へ吉井さんのイワシ、サバ網の漁船が帰って来たので見に行く。まだ早いが漁は良いとのことだ。どうかして試験操業が大漁であることを祈る。今日は消防演習があり、町内で放水演習をやったが大勢が見物している。帰って午後六時頃、農園へ行つて見る。58号は今が花盛り、12号、14号、その他も蕾がかなりふくらんでいる。今年は一般に害虫が少なく花つきもよろしい、必ず豊作と思う。せいせい手入れせねばならぬ。

(続く)

岬短歌会四十周年を祝して

大 澤 文 子

「海の町だからなア、岬という字を入れて『古平町岬短歌会』という名称にしようかねエ」

海鳴主宰北見恂吉先生の第一声でわが古平町に短歌会が発足したのだ。

あー思えば昭和四十年九月二十六日：。古平町にはあの頃、会場と名のつく場所もなく、信用金庫の二階の一室を無理をお願いして、短歌教室の第一回目が発足したのだった。

初回から出席した懐かしい会員名を列記してみよう。先ず坂井満、池田由太郎、テルご夫妻、南達淳子、岩井節子、佐藤卓史、西下スエ、池田ハルの諸氏、それに大澤の九名だった。

初めての短歌教室なので、会場へ入る会員は皆怖ず怖ずと緊張のかたまりと化した。

お迎えした北見恂吉先生の厳しい面ざしに咳ばらい一つする者もない。だが先生の、

「さあ今日から一緒に短歌の勉強をしようなア」優しいお言葉

面もちを見せはじめた。

先ず自己紹介からということだが、端から順にということだったが、皆もじもじと声が低い。詠草は二首ずつ提出とのことだった。自己紹介のあと、また端

から順に自分の短歌をよみあげる。先生はひとりひとり丁寧に、間をおかれ批評して下さった。皆下をむいたままもじもじと言葉もない。

「初めてなのに、全員よくがんばったね」

温かい先生のお言葉に、やつと和らぐ面を見せはじめた全会員だった。一応全員の批評と添削をいただいた後、ご講義を数十分いたただく。その時は抒情歌について講義された。

「一体現在の短歌には、抒情歌が乏しいのはどうゆうわけであろう。しつとりとした抒情歌はいいものだよ。歌は詠むもので作るものではない。歌は抒情歌なのが本質なのだよ」

諄々と説かれる先生のお言葉に感動するのみ、三時間余の第一

回の勉強会は終了した。

会員はそれぞれホッとした表情を見せ、一か月後の歌会の日を約し、三々五々帰途についたのだった。

あの時、私は皆と別れひとり帰る道すがら、何かふるいたつ様な小さな叫びが心の隅にここのを覚えた。そして思った。「あの講師先生の厳しい、そして優しいお教えを頂きこれから勉強してゆこう」と。

「思いおこせば昭和二十二年四月、種々の事情で私共家族は、幼な子二人を連れて札幌から古平町の住人になった。バスも通らぬため、余市から定期船金華丸に乗った。船着き場まで見送りに見えた私の両親は、涙していつまでも手を振っていた。

「ごめんネ、ごめんネ」

私は心の中で泣いた。が、いつか私は、果てしなく広がる日本海の対岸遠く増毛、雄冬を望む浜辺に茫然と立ち、啼き交わすゴメの群に興味をもちはじめた。幼ない頃より書くことの好きだった私は、手のかからなくなった幼な子達のか合い間を見つけ、短歌の勉強を始めていた。道新の選者中山周三先生選、また芥子沢新之助先

生選にたびたび投稿するようになった。

古平の海辺には歌の材料になる個所が数々あり、先生方から講評を頂くのがうれしく、スクラップブック何冊かに収めふえゆく楽しみを覚えていたのだった。その頃であつたらうか、北見恂吉先生からご指導を頂くようになったのは。

二回目からも会場のことで伊藤町長から役場の一室をお借りしたり、沢江公民館、わが家の海側の部屋も会場に早がわりし、余市から歌びと達も集まり楽しい歌会を開いたことを覚えてい

いま平成十七年九月二十六日、古平町岬短歌会は四十周年を迎えた。双手をあげて祝福したい！初会からのべ六十余名の名簿を繰りながら少人数とはなつたが、初会から歩み続けているただ一人「池田テル氏」に心から花束と拍手を贈りたい。これからも新鮮な息吹きをとりいれ、会長鈴木時子氏と共に歌の道に邁進されんことを切に願いたい。

まだ残暑の続くこの真夜、私は原稿紙四枚を封書におさめふーっと息づいた。

札幌通信 第34信

ふるさとを語り合いたい

吉 川 義 雄

人はどんなに背伸びしてみたところで、所詮は一人では生きてゆくことが不可能な存在らしい。

年を経て、尚ふるさとを恋しく想うのは、その理由をあれこれ分析してみたところで、それ程役にも立たないようだが、ただそこには人が居た。

山も川も海の色も、いづこの地に行ってもさほどの変わりはないが、そこには景色に同化する友の姿は無い。

同郷の人達には、たとえそれが別な町から来た人でも、自分との係りが出来上がっていたと、今では固く信じている。

思えば、ふるさととは不思議な存在でもあるようだ。八〇数年の歳月を経て、数え切れぬ多くの人達と縁を結んできた。

異国の戦場で、南海の激浪の上

で、生死を共にした若い戦友達も多い。彼等がまだ生きていて語り合えば、夜を明かすだろう。しかし、不思議に同郷の香りは無い。

「ふるさとを持つている人はいいなア……」

と、妻が、ある時妙な言葉を出したのを聞きとがめて、「あんたは、ここがそうだろう……」と、私になじると、「そうには違いないが、もう誰もいないもの……」が、彼女の返事だった。

都会の一角でも、今から三〇数年前の白石地区は、田舎の言葉がそのまま、玉葱畑が広がっていた。

あの人も、この人も、皆中央地区に移ったり、お嫁に行ったから、誰も昔の人はいなくなったのこのと。

妻の述懐では、幼かった頃の友

がいて、今でも豊平川畔で昔話を語ったり出来るところを、ふるさとと言うのらしい。人が欠落していた。

ビルが林立し、車の流れが轟音をまき散らして走っている。彼女の生まれた場所を、彼女は素直に「ふるさと」と呼べぬらしい。友のいなくなった豊平川畔に、彼女はめつたに行くことはない。

妻のふるさとへの思いで気付いてみると、今の古平が都会のようにならば、いっただいんな気分になるんだろうと……と。

古平を離れて、一番多く私の手元に届くお手紙も次第に数が減り、年賀状だけとなり、それさえもめつさり数少なくなった。

特別の用事もないが、たまには電話を通信の手段としたときなど、時にはどちらかが中止の声を出さぬ限り、若々しくはずんだ声の途切れることはない。

互いに知っている古平衆の最近情報を、何としても伝達したいのだ。内容次第で喜びもあるが、大きな悲しみもある。

ふるさとを共にする者にとつ

て、どんなことでも全部共通の話題になって、各自の生命に収まるようだ。

× × ×

米国でのハリケーンの悲報も、日本中を荒らして去った台風十三号も、わがふるさとに置き換えたなら悲痛は深刻だ。

人の住むところ、必ず誰かのふるさとに違いない。

宇宙から見ると地球は暗黒の空間に青く輝き、それは美しいと、どの飛行士も感動で語っている。

過去、現在、未来と三世に続く、仏の言葉を信ずれば、私達の生命もまた、どこかの国土をふるさとにして、若々しく生まれてくるのだろう。

生命のふるさと地球を、大切に護るために京都議定書に、ほとんどの国が調印した。

大国のエゴむき出しに、米国だけがハナつかから調印を拒否した。

「かとりーな」が襲い、今また次の巨大ハリケーンが近づいていると報じている。

ふるさとを語り合える人のいる限り、ふるさととは美しいし、ふるさとも人を護る。

□官有物の払下げに怒り

「議會を開設せよ」という運動は意外なところから始まった。

開拓使の時代に戻つて明治五年、アメリカから歸つて來た開拓使次官黒田清隆は、ケブロンを顧問として、大きな抱負をもつて開拓使十年計画を立てた。そして黒田次官は同七年には開拓使長官に昇進していた。

北海道開拓はこの十年を一期間として、約一千四百万円という當時としては莫大な金額を投じた。それでさらにその事業を継続するかどうかということが内閣で問題となった。

當時の佐野大藏卿(大藏大臣)は、国事多端のときに一地方へ多額の資金を支出するという考えはなく、同一四年の最終年を待つて開拓使を廃止することを決めていた。北海道の開拓は、民間の財力のある者に委託し、政府はこれにある程度の補助をすればよいだろう、という意見であった。

これに対して黒田長官は、開拓使の事業が中途で廃絶されることを残念に思つていた。そこでこれを伝え聞いた大阪の巨商といわれた五代友厚は、早速仲間と図つて暗躍

を始めた。

五代友厚は薩摩の出身で、早くから外国に渡つて世界の情勢にも明るく、新政府の外交事務にも関わり、政府の重要人物とも関係し活躍していた。官職を止めると大阪に移り、海外貿易と政府のご用を引き受け、大阪の実業界に大きな勢力を持っていた。

開拓使に対する政府の動きを見て、北海道の官有物全体を三十八万円余りと見積もり、これを三〇か

——蝦夷地から北海道へ—— 地方自治の移り変わり

年賦の無利息で払下げてほしいと黒田長官に願ひ出た。これには自分の名前を出さずに関西貿易商会という名義であった。

これには函館をはじめ各港の倉庫、船舶、敷地と、とにかく開拓に関係する物件はもろろん、札幌のビール醸造所、ぶどう園、ぶどう酒醸造所、牧畜場一切、鯨や海獣などの漁業権、その外官有物と名のつくものの全部を含むので、その価格は三千万円以上のものであった。

それをわずか三十八万円余り、しかも無利子というのであるからその不当なことは明らかであつたが、黒田長官は払下げても差し支え無し、という同意したことを書き入れて内閣に提出した。これは明治一四年七月のことであつた。

これが閣議に上がったとき、大体において異議なしという雰囲気であつたが、※参議・大隈重信は猛然とこれに反対した。するとこれに続いて政府部内から強硬な反対論

が盛り上がった。

多くの有力な新聞も一斉に政府を攻撃する口火を切り、それまで政府側であつた新聞までもこれに加つた。また、東京や大阪などで演説会には数千人の聴衆が集まるといふ騒ぎになつた。薩摩に関係ある官僚と政府が結託していることを批判し、これによつて、次第に高まつていた国会開設要求の運動にもはずみがついたのであつた。この払下げ問題は、国会開設をめ

ぐる政府内での意見の対立にも関係し、政府内の危機感を高めることにもなつた。

結局、この払下げ問題は取り消されて解決したが、そのかわり反対派であつた参議大隈重信は、政治的な圧力で免官になり、政府部内の大隈派と見られていた人達もみな政府から去つてしまつた。

※参議(さんぎ) 〓 明治政府の最高官庁は太政官(たじょうかん)といい、その最高官職が太政大臣、参議はその下にあつて政府の中核をなす重職で、この中から各省の卿(大臣)となつた。何回か制度が改正されたが、明治一八年内閣制度の設置で廃止になる。古くからあつた制度で、當時は「だいじょうかん」と呼ばれていた。

大隈重信(おおくましげのぶ) 佐賀藩出身、明治政府の大藏卿。憲政党を結成して、明治三二年、憲政党内閣の首相となる。のちに東京専門学校(現在の早稲田大学)を創立。

□広がる民権運動

払下げ問題は、折から政府内で国会開設についての意見が分かれていたこともあり、政府はこのことで危機感を深めた。国会の早期開設を唱えていたのが参議・大

蔵卿の大隈重信であつたので、明治一四年、先のようなことで決着をみることにした。

しかし、これと同時に一〇年後に国会を開設するという詔勅が公示された。これにともなつて憲法の制定作業が本格的に始まり、政党内閣の結成など、その後の歴史に大きな影響を与えた。松下事件によつて、全国の関心が北海道に向けられることにもなった。

明治一〇年代になると、全国的に自由民権運動が高まつてきた。だが北海道には未開の地が多く、本州とは条件が違ふこと、保護の厚い特別区であることから、国会とか、民権とかは考えられないという意識が底にあつた。当時の開拓者には、毎日の大自然との戦いだけで、政治を考えるゆとりなどはないとみてよい。

しかし、明治一三年頃になると次第に政治への動きが出てきた。『函館新聞』に、北海道は未開だから政治を論じる資格がないというが、函館や福山(現在の松前)、札幌・小樽などは本州の諸都市よりもむしろ繁栄しているではないか、北海道には地方税を課していないというが、道民から徴収して開拓に使つてゐる税金は地方税ではない



↑ 函館新聞の題名 (明治23年1月)
明治11年1月7日、北海道で最初に創刊された民間新聞で、はじめはタブロイド版(現在の新聞紙1ページの半分)4ページで5日ごとの発行であつた。部数は約500部であつた。明治18年から日刊になったが、1000部ほどであつた。昭和12年廃刊になった。

か、と言つて、道・町村議会の開設を主張する記事が掲載された。

また明治一三年、室蘭の本多新(ほんだあらた)は、国会開設の建白書を元老院に提出したり、全国有志に檄文を送り、道内にもその呼びかけを行なつてゐる。本多は言う。特別地区だから国会論も半分でいいというものではなく、国家のため、開拓に特別苦勞をしているのだからこそ、参政の権利は要求できるのだと主張した。その二年前、地方三新法が公布

されたが、北海道にはそのうちの郡区編制法の一部が適用されただけであつた。その後の区町村会法も北海道は除外されたが、寿都・島牧・磯谷・歌棄などでは、郡会設置要求と、函館区会設置運動が活発に行なわれ、函館区会だけが翌年の開設を認められた。区会を設置されたが、区会そのものには制限があり、議員もあまり熱心ではなかつたが、本州同様にという自治的な独立意識は強まつてきていた。こんなときに起きたのが例の事件であつた。

北海道の命名について

北海道は古くからえぞ地といわれてきたが、もともと「えぞ」といふのは民族の名であつて、地名ではなかつた。したがつて、□えぞ・奥えぞ・東えぞ・西えぞ・北えぞなどというの、実は民族の名を地名に転用したまでのこと、これではまぎらわしいといふことから、すでに江戸幕府時代から、できるなら適当な名をつけたといふ考えられていた。

そのことは一八五五年四月一日、ときの箱館奉行堀利熙(ほりとしひろ)が老中阿部正弘に對し、

「国号選定及び駅路開発の義」について、という意見書を提出していることからみてもそれは明らかである。

一八六九年七月八日、えぞ地に開拓使が新設されると同月十七日松浦武四郎が「道名の義につき意見書」を提出した。そして、日高見道・北加伊道・北海道・海島道・東北道・千島道の六つの道名候補を選出したのである。

そのよりどころとして歴史的な理由に重点をおいた。すなわちあらえぞ・にぎいぞ・津軽えぞの古名から、えぞはもともと地名でないことを論じ、北加伊道については、「夷人みずからその国を呼ぶのに加伊」と、その出典をあげ、「加伊と呼ぶこと。いまに夷人たちが互いにカイノーと呼ぶ。女児のことをカイナー、男児のことをセカチー、また、なまつてアイノーとも近ごろ呼んでいる」と述べている。

武四郎は右にあげた六つのうち、北加伊道が最も適当であると考えていたが、これが採用されることになった。その「加伊」が「海」となり、ここにはじめて『北海道』という名称が生まれたわけである。

中 戦 中 戦
泣き笑いの
樺太漁場体験記
戦 後 戦

吉 野 慶 一 郎

北海道への密航を逃したその矢先、二隻の船が私達をあざ笑うかのように出港して行きまし

た。この日は塩蔵鰯を積み込むためにソ連の大型船が入港し、昼夜ともはしけなどの往来で賑わっていました。そのドサクサと闇に紛れて決行したわけです。「やられた!」と思う反面「お見事! 無事を祈ってる」という気持ちもありました。

五月も半ば、鰯の切り揚げの始末も終わりました。心配していた鰯の代金は、漁業組合を通じて納得のいく金額が支払われました。何事にもルーズなソ連にしてはまことに珍しく、敏速な処置に驚きました。おかげで予想以上の利益があり、船頭さんをはじめ漁場の人達に給料の外に手当も加えて支給でき、

皆の笑顔も見られ「新米親方」の面目もどうやら保てました。

鰯は幸い好漁に恵まれましたが、親父が念願としていた密航は情報の戸惑いと油断から、一歩手前で無念にも挫折してしまいました。「これは何も親方のせいではない。運が悪かったんだ。あきらめましょう。」というのでしたが、その後も悶々とした日々が続きました。

そしてある日のこと。番屋へ顔見知りの沿岸警備隊長のB中尉が立ち寄り、「コンニチハ、吉野さん。お元気ですか。船で北海道行きはやめたのですか? 残念でしたネ。私達は何時も監視してますからね。」と、両手で双眼鏡の形をつくり海を見る真似をします。

私は平静をよそおいながら

「隊長、私は北海道へ逃げる気なんかありません。こうして鰯漁場をやってソ連に協力してるでしょう。これからも漁業を続けますから、心配はいりませんヨ」と、言ってやりました。

半信半疑の面持ちでしたが、勝ち誇ったような態度で立ち去る後ろ姿に、敗戦の現実を強く覚えました。そして憤然と反発心が燃え上がってきたのです。

「ロスケ共にナメられてたまるか、今に見ていろ。やれば出来るんだ。」という親父の口癖がよみがえってきました。

そうと心に決めたら、かえって心身が晴れやかになり、希望がわいてきました。成功すれば親父への孝行にもなると、自らを励ましたのです。

親子二代が、こうまでして密航に執着したのには理由がありました。昨年の秋頃でしたか、実は密航船に乗せるという約束を取り交わした人がいました。それは全くアカの他人の命を助けるためでした。

その人はNさんといい、札幌に本拠をおき土建・木材業を主

としていて、樺太でも手広く事業を経営し、戦時中は軍部の土建作業もして信用のある人でした。数香で敗戦になり、九死に一生を得て野田の知人宅にたどり着いたということでしたが、

戦時中は軍への協力者として、ソ連の戦犯容疑者になっていたとのうわさが流れました。

その野田の知人などが何度となくわが家に来て、密航船で助けて欲しいという依頼があったのです。ことは簡単ではないのですが、すぐには承諾できませんでしたが、ある日、突然本人が訪ねて来ました。「外出も出来ないで失礼していましたが、今頼れるのは吉野さんのところだけなのです。厚かましいお願いですが私を助けてください」ということでした。

やがて親父が「あなたのような人は、これからの戦後の再起復興に必要な人です。及ばずながら手助けをしましょう。私は船を出す決心をしています。もう少し春まで、この話は内密にしておいてください」という約束があったのです。(続く)

本州地区稲倉石会

主力工場だった酒田で

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

今年度(平成十七年度)の本州地区稲倉石会を、酒田市で開きました。

酒田は、稲倉石鉱山で掘り出したマンガン鉱石を、古平港から鐵興社の主力工場である酒田工場に海輸し、合金鉄を製造していたという、稲倉石とは密接な関係があったところです。

私が稲倉石に転動した昭和三十年代の工場は、十二万坪の敷地と、正社員・臨時工・季節工を合わせると三、〇〇〇名を擁していた東北地方屈指の大工場でした。

現在は、東北東ソー化学㈱と改称し、地域に密着した企業として更なる発展が期待されております。

稲倉石に働く者の共通した思いの一つに、マンガンが合金鉄に変化する巨大な電炉群を自分の目で見てみたいという願望がありました。

でも、稲倉石から酒田への出張は殆どなく、夢がかなわぬままに売山となりました。

その夢を、売山三十八年目にして実現する事が出来ました。

参加者は二十四名で、第一日目は、酒田近郊の温泉で心ゆくまで飲み・語り、お開きの後は会長(旧所長)や招待者などのお偉いさんの部屋にどっと集まり、深更まで二次会の花を咲かせました。

現役の頃は、所長さんや課長さんと対等で話しをしたり、一

献を交わす事は殆ど望めなかったのですが、今は、どっちが所長か平社員かと紛う程に、かつての垣根は全くなく、そこにあるのは

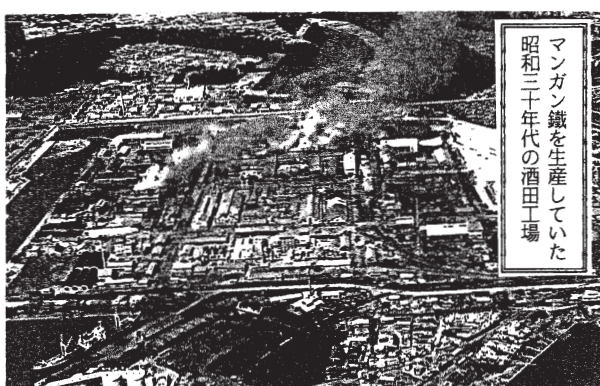
え、人影もまばらなオートメ工場へ変身していました。

『鉱山で苦楽を共にした同志』という太い絆と、思い出の数々でした。

押さえ難い寂しさの中で、時代の変遷を見せられ・知らされた見学となりましたが、そんな中で、遠い存在となった稲倉石鉱山の私たちを快く迎えて下さいました会社幹部の方や、終始付き添って頂いた社員さんの温かさが心に刻まれた貴重な見学となりました。

第二日目は、お目当ての酒田工場の見学をしました。が、工場の広さと佇まいはさして変わりはなかったのですが、轟音をなびかせていた合金鉄の電炉が消

工場を後にした私たちは、地元会員の案内で、NHK連続テレビ『おしん』の撮影舞台となった「山居倉庫」・日本初の写真専門展示館である「十門拳記念館」・秀峰鳥海山を借景にした「酒田市美術館」・日本海からの強風を活用した「風力発電機群」などを足早やに回り、長年の夢でありました酒田での集いを終える事が出来ました。



マンガン鐵を生産していた昭和三十年代の酒田工場

私達のこの会は、齢を重ねる毎に欠席する会員が多くなりますが、互いの絆が残っている限り、稲倉石鉱山の思い出が尽きない限り続けたいと念じております。

師走川陣地陥落

北極山へ撤退

その頃、八方山の連隊本部か

ら重要書類が届い

ていた。書類のタ

イトルには確か

『連隊長訓示』と

書かれていた。内

容は「積極的な行

動は禁ず。越境す

べからず。防衛戦

闘をせよ」という

ようなことを、ガ

リ版刷りで細々と

書いてある不可解

な文面であつたよ

うだ。

この書類を神無

川陣地、師走川陣

地の戦闘中の各中

隊、小隊、分隊に

届けるようにと、

浮穴曹長から私と

青木上等兵に命ぜ

られた。二人とも重大な任務で

あり、決死の覚悟で最前線へ向

けて出発した。神無川陣地の大

森小隊と機関銃分隊は、捜し当

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

34 橘 義 春

てて渡すことができた。そして師走川陣地に向かったが、陣地は敵の手に落ちたか、移動したのか所在がつかめない。

午前中に大隊長と

いっしょに来た師走

川陣地には、敵が入

り込んでいるよう

だ。四中隊とそれに

配属の速写砲小隊、

機関銃分隊、通信分

隊に何とかして書類

を渡そうとあせつた

が、敵がうようよい

るのでこれ以上近づ

けない。もしも敵に

発見されたら自動小

銃の餌食になり、書

類は敵の手に渡って

しまう。この際はま

ず安全策をとった方

が適切だと考え、「

青木さん、これ以上

はどうにもならない

ので諦めよう。暗く

なったら方角が分からなくなっ

てしまう。帰ろう」と、残念だ

が引き上げることにした。

途中で、拳銃を持った下士官

と兵四名に出会った。下士官は名前は分からないが、兵營で何度か会ったことがある。彼等もこれから師走川陣地に行くというが、敵がうようよしているから気を付けるように、と言って北と南に別れたが、あれから彼等はどうなったかは分からない。

やつとの思いで神無川の大隊

本部に帰ったが、陣地はも抜け

のからで誰もいなかったが、木

下大隊長一人が私達を待つてて

くれていた。状況を説明し、師

走川陣地の各隊に書類を届けら

れなかったことを話したら、

「ご苦労だった。大隊本部は北

極山へ移動した。この先の道を

西に向かつて行くと追いつくだ

ろう。すぐ行きなさい」

「ありがとうございます。お先

に行かせていただきます」

急な移動命令だったらしく、

スコップやつるはし等の道具が

あちこちに散乱し、小銃弾が入

った箱もあった。大隊長が、

「それは持つて行ったほうがよ

い」と言われ、青木上等兵が、

「よし、俺が持とう」

箱は相当な重量だ。二人で交代で背負い大隊の後を追ったが、木下大隊長とはこれが最後の別れになってしまった。

第一大隊が北極山へ撤退した

のは、木下大隊長全員で敵陣へ

の斬り込み突入を決意したから

だった。連隊本部に電話で申し

入れをしたが、副官の油谷大尉

が斬り込みの中止を説得し、連

隊長も直接諄々と説いてようや

く撤退の決意をさせたという。

この夜、木下大隊長は単身で

敵陣近くまで潜入し、森林に火

を放って焼き打ち戦法をとった

が、湿気が多くて火勢が上がら

ず、成功しなかったという話も

聞いた。

ともかく急げと、大隊本部を

追いかけた。途中、師走川陣地

から後退して来た四中隊の兵二

人と出会った。その内の一人は

大腿部に砲弾の破片が突き刺さ

っていて、戦友の肩につかまり

「青木さん、みんな戦死しちゃ

ったよ」

と、男泣きに泣いていたが慰め

の言葉もない。先に行くからと

言って別れた。

△続く▽

教科書のいまむかし

◇国民学校と教科書

昭和一六年二月八日、緊張の高まった中で太平洋戦争が始まりましたが、この年の四月から全国の小学校は国民学校、尋常科は初等科と改称されました。

昭和の時代に入ってから、日本と周辺の諸国との間に紛争が続いていましたが、昭和一二年七月、その後の太平洋戦争へと続く日支事変(後に第二次世界大戦に含まれる)がおきました。

戦争を背景にして教育も軍国主義色のいつそう強いものとなり、その典型として国民学校が生まれたと言つてもいいでしょう。国民学校ではこれまでの教科を国民科・理科・算数科・社会科・体育科などという新しい教科に組み替えて、その目的を(※1)「皇国民の錬成」において、決戦下にふさわしい教育体制を整備したのです。

※1 皇国民(こうこくみん) 天皇が君主として統治する国の国民、皇国という言葉は昭和二〇年までは日本の別称でもあった

◇第五期の国定教科書

この第五期の国定教科書は、今までに見られなかったような特殊な超国家主義・軍国主義の強い性格を持つていました。

その原因の一つは、軍の圧力の下に教科書が編集されたということです。国民学校の教科書の編集が始まると、軍からは数百項目にもなる教材の細目が文部省の担当部局に渡されました。その項目は、まるで国民学校の教科書が軍事教科書かと思われるような内容でした。

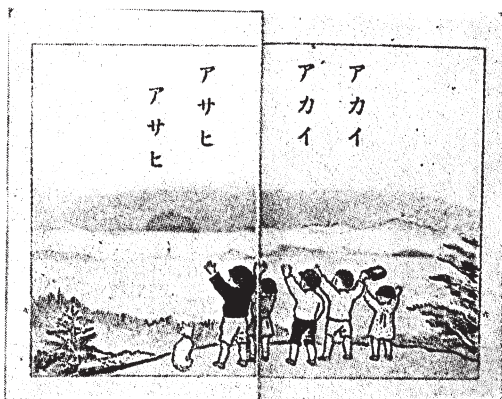
このようにしてでき上がった教科書は、軍国主義の強化と宣伝という、これまでの傾向が極端な形で現れたものとなりました。

戦争を「聖戦」と代えて、戦争へ向けて国民を努力させようという意図がありました。

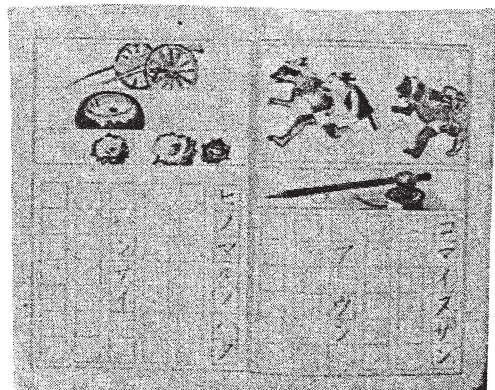
国語は国民科の中の一科目となり、国民科国語として発行されました。

国語教材は児童の発達段階に

←初等科第一学年の国語教科書



←副読本「コトバノオケイコ」



にそつて、初等科一・二学年、三・四学年、五・六学年、高等科一・二学年の四期に分けられ、初等科一・二学年は「ヨミカタ」のほかに、「コトバノオケイコ」という副読本のようなものがありました。教科書は旧読本の編集方法を受けつぎながらも、昭和という時代の影響を強く受けていて、軍事的な色彩を濃くしています。特に太平洋戦争の緊迫した時期になってから編集された高学年の教科書には、戦時読本としての特色が著しく現れていました。

何一つ報ゆることの非ずまま逝かしめし父母か長き悔いあり
 かなしみは年年うすれ父逝きし日さへあやふく忘れむとしめ
 法事営む生家にありて父長く臥しぬしベットに目を注ぎぬつ
 香煙は漂ひ位牌の面のややにくすみて来たることもはかなし
 頬骨はややに角ばる父なりし遺影の前に長く坐りぬ

父母を偲びて

瀧 内 優 子

長病みの父を思ひて経を誦す親子と言ふは何ぞかなしき
 肝を病み母は死にたり血統といへるをさびしむ昼を臥しつつ
 逝きましし年に植えたる鉄線の花は咲きつつ母の三十七年忌
 片羽根のものがれし蟬を曳く蟻をさけて墓参の径にとどまる
 秋めきて来たりし墓地の寂かにて父ははの墓に蟻うごきゐる

◆町内会要望事項として◆ 古平ふる里資料館の設置について

ニシンの水揚げが多いので有名な中場所といわれた古平が、江戸時代末期から明治・大正・昭和と続いて、先人がニシン漁やタラ釣り漁で活躍し、水揚げ作業に使われた木造船・定置網の模型・ニシンの沖揚げ道具・ニシンの加工道具・当時の古い生活用品・古い写真・古い書物・各職種の古い道具類などは、今のうちなら作り方を知っている人もい

るので、復元もある程度まで出来ると思います。あと一〇年もしたら作ることも、道具の名前も知る人がいなくなります。ちなみに屋根の無い資料館として、港町厳島神社の境内の石灯籠は、天保十五年辰五月吉日古平運上屋城川長次郎と刻んであります。その当時は郷社であったと古老から聞いております。

〈銀座町内会長福津誠悦氏より〉
これは町内会から町への要望事項として提出された中の一項です。

田口博久さん

▼古平尋常高等小学校卒業記念
アルバム 昭和四・五・六年度
ほか学校関係の写真一三枚
▼童謡アルバム第一集（二〇枚入）
福津誠悦さん

▼「ニシンの郷土誌」（私家版）

かつて熊雄（現在の小樽市桜で練建場を経営していた内田五郎さん）が、先に「練建物語」を出版されましたがその続編ともいえるものです。（二ページ）

「寄贈ありがとうございます。」

坂本甚衛さんの

「逝去を悼む」

本紙に一七回にわたって寄稿して下さいましたが、去る九月五日逝去されました。

「体の不調からこれが最後になるかもしれない」と、『地質調査の旅』を完結されましたが、それが絶筆となっていました。生前寄せられましたご熱誠に深く感謝し、心から哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

短歌

吉平町岬短歌会

甲子園に二連覇して海渡る優勝旗われら喜び涙して迎ふ

池田 テル

手を合はせ有り難うと言ふ百歳の母の姿のまこと小さし

鈴木 時子

思ひ出の丘のなだりに種こぼれカボチャの花のあまた咲きをり

竹内 コト

お盆迄目を樂します谷空木今年も会へた古里の庭

田中 香苗

孫連れてゆるき歩みにうす紅の昼顔の花道の辺に咲く

丹後 初江

孫台風の如く受話機に泣き叫び爺は優しと娘に意見さる

寺田 清治

無農薬野菜を作るたのしみは老を忘るることにつながる

東 美知

鷗らの鳴き交し舞ふ前浜の礁を染める晩夏の夕日

堀 典子



吉平俳句会

棚経は短きことと言ふけれど 斉藤波留

童心に返り兄弟花火かな 山口悦子

月白や雲の流れを仰ぎ見る 越野敏雄

漁場移動する漁夫等みな日焼顔 大和田絵伊

稲妻の窓を映して入りくる 高橋重子

就職の選択せまる夏休 仲谷比呂古

バス旅行秋風に酔ひ景に酔ひ 室谷弘子

孫ら来てがぶり西瓜に笑顔かな 泉清三

秋立ちぬ風の匂ひもそれなりに 外山俊久

新涼の雨の夕べに來たりけり 渡辺嘉之

音読の声よく透る秋の夜 堀典子

落葉松に秋の雲ゆく沖支度 本間寿昭

日本海育ちのわれに土用浪 越野清治

古平町史年表

昭和16年(1941)～ 続く

- ▲鮮魚・魚介類の配給統制規則が公布される
- ▲各町内会に各戸への配給業務を担当する産業部長をおく
- ▲明和青年学校が明和国民学校に併置される
- ▲警察からの要請により古平・美国の3劇場と余市町の興業関係者で映画演劇協会の下部組織が結成される
- ▲婦人会の協力により、毎月乳幼児の健康診断を行なう
- ▲町内に伝染病が多発する(罹患者26名中ジフテリア23名・内3名が死亡する)
- ▲青年学校女子部を開設し、古平国民学校に併置する
- ▲稲倉石鉱業所が私設の青年学校を開校する
- ▲小樽税務署管内での郡部家屋賃貸価格調査委員の選挙が行なわれ、古平町から越中庄七が選任される
- ▲余市～古平間の定期バスがガソリン不足(ガソリンの配給が止まる)のため運行を休止する
- ▲自家用自動車のガソリンが使用禁止になる
- ▲でん粉アメの製造講習会が役場で開かれる
- ▲後志支庁から講師が来て、役場でみそ・しょう油(魚醤)製造の講習会が開かれる
- ▲古平青年学校後援会が発足する
- ▲国民労務手帳法が実施になり、これには身分・経歴・技能程度・賃金などが記入され身分証明書代わりでもあった
- ▲町内で組織された勤労報国隊が稲倉石鉱山へ動員される
- ▲水難救済会沖支所が廃止になる
- ▲国民勤労報国協力令が公布され、勤労奉仕義務が法制化されたことで町内でも勤労報国隊が結成される
- ▲道庁や支庁、職業指導所から係官が来町し、商店経営者の重工業や食糧増産関係への転業を紹介する協議会が役場で開かれる
- ▲大東亜戦争(後に第二次世界大戦)が始まり、当日、児童や各団体が参加して琴平神社で戦勝祈願祭が行われる
- ▲開戦による町民大会が古平小学校で開かれ、宣戦布告の書を奉読し町長などからの挨拶がある、ラジオのあるところには人が集まりニュースを聞く

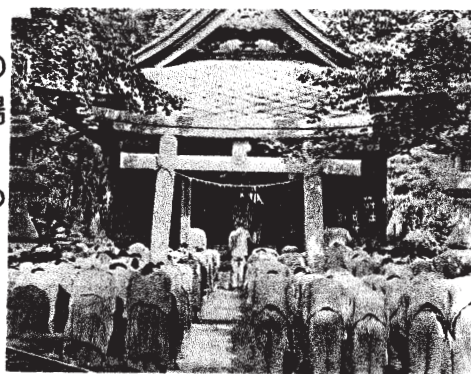
→大人気の喜劇王エノケン
(榎本健一)戦後も映画で大活躍をする



↑古平青年学校生徒の軍事訓練



↑米英との開戦を伝える新聞



↑児童が琴平神社へ戦勝祈願